様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０１２５

研究課題名（和文）西鶴と団水の文芸に関する総合的研究

研究課題名（英文）A general study on the literary works of Saikaku and Dansui

研究代表者
水谷　隆之（Mizutani, Takayuki）

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：６０４５４５００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,700,000円、（間接経費）　810,000円

研究成果の概要（和文）：西鶴と団水の浮世草子、俳諧およびその周辺諸分野に関する研究を行った。俳諧については、特に西鶴晩年の連句における〈疎句〉の付合手法に着目して分析し、その注解を行った。浮世草子については、西鶴と団水の〈寓言〉についての理解の共通性を指摘するとともに、俳諧の手法を用いた浮世草子の特徴について論じた。また、以上の研究成果を含む著書『西鶴と団水の研究』（和泉書院）を刊行した。

研究成果の概要（英文）：This is a study on Ukiyo-zoshi and Haikai of Saikaku and Dansui. In the research of Haikai, the annotation was newly applied to the works of Saikaku in the Genroku period. In the research of Ukiyo-zoshi,the similarity of the understanding of allegory, so called "Gugen" between Saikaku and Dansui, and the feature of Ukiyo-zoshi created by using the technique of Haikai were clarified.Those reserch results were published by Izumisyoin as "The study of Saikaku and Dansui".

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：井原西鶴　北条団水　浮世草子　俳諧

１．研究開始当初の背景

天和 2(1682)年刊、井原西鶴作『好色一代男』を嚆矢とし、以後約百年もの間、上方のみならず江戸にまで広く読者を獲得して流行した浮世草子は、明治以後の文学にも多大な影響を与えた。娯楽性を追求し、当時の風俗、人情の諸相を多様な方法によって描きあげた浮世草子は、町人勢力の拡大に伴い独自の文化を形成し、日本の出版文化を飛躍的に向上させ、その後の日本庶民文化発展のための重要な基盤となった。

また、浮世草子と同様、日本文化に大きな影響を与えたのが、和歌とならぶ日本独自の短詩型文学である俳諧である。先行古典を摂取するのみならず、和歌・漢詩、演劇、絵画など様々な文芸ジャンルと関連し、当代性を多分に加味して織りなされる俳諧は、庶民の間に爆発的に流行し、それまでにない新たな日本人の美意識を確立した。

さらに、浮世草子と俳諧とは、相互に密接にかかわりあってもいる。特に西鶴の浮世草子は俳諧の素養に基づいて創作されたものであり、俳諧の手法や趣向が多く採り入れられている。しかしながら、これまで両者の関係を総合的に捉えた研究は必ずしも十分になされてはいない。西鶴の俳諧については、今栄蔵氏（『近世初期俳諧から芭蕉時代へ』笠間書院、2003 等）や乾裕幸氏（『初期俳諧の展開』桜楓社、1968、『俳諧師西鶴』前田書店、1979 等）による一連の優れた論考があるものの、西鶴晩年の俳諧に関する研究は未だ十分ではなく、なお検討を要する課題が少なくない。一方、西鶴の浮世草子については、従来多くの研究者により調査・分析が積み重ねられてきており、近年においても雑誌『西鶴と浮世草子研究』（1～5 号、笠間書院、2006-2011）が新たに刊行されるなど、その研究は一見活況を呈している。しかし、西鶴作品の成立や注解など基本事項においていまだ不明な箇所が多く、そのためこれまでの研究成果を十分に活かし切ることができず、研究者毎に作品評価や読解の立場が錯綜したまま、研究が進められているのも事実である。

国内のみならず海外においても西鶴作品への関心は高く、特にフランスでは既に西鶴作浮世草子のほぼ全てが翻訳、刊行され、アメリカでも抄訳を中心に俳諧を含む多くの西鶴作が刊行されている。現在、海外における日本文学研究の趨勢は、翻訳をこえて様々な文学理論と絡める、あるいは日本文化の諸ジャンルを総合的に捉えようとする、より学術的な研究に移行しているが、そのなかで西鶴研究はやや停滞している。その大きな要因は、西鶴作品の基本事項に前述のごとく不明点が多いことにある。すなわち、西鶴作品、特に西鶴遺稿集への団水の加筆・擬筆の有無や、西鶴が晩年に俳諧活動を再開した経緯、浮世草子と俳諧の関係、出版書肆や俳諧師たちの交流関係およびそれらが相互に与えた影響関係についてなど、さまざまな未解決の問題を孕んだまま研究が進められており、その解決が求められる。西鶴の浮世草子や俳諧、周辺諸ジャンルを同時に見据えた、より多角的かつそれを支える基礎的研究が必要である。

２．研究の目的

浮世草子・俳諧・出版メディアなど、近世のみならず後代の日本文化を形成するうえでも重要な役割を担った文芸諸ジャンルの研究を行い、それらを有機的に関連させ、日本文化の特質を立体的に浮かび上がらせることを目的とする。うち、「西鶴と団水の文芸に関する総合的研究」と題して行った本研究では、井原西鶴とその第一の門人であった北条団水の双方について、文芸諸ジャンルに亙る多角的な視座のもと、広範かつ精密な調査・分析を行い、それら一方についてのみでは不十分であった各研究を相互に補完、相対化し、元禄期の日本文学の特質を浮き彫りにすることを目指して、以下を主要な研究目的とした。

(1)俳諧研究

元禄期における西鶴と団水の俳諧諸作品を精査し、元禄俳諧や蕉風俳諧との類似点・相違点を明確にし、それぞれを俳諧史上に新たに位置づける。

(2)浮世草子研究

俳諧と浮世草子の間にみられる発想や内容面の共通性に着目し、浮世草子と俳諧の関連性を指摘するとともに、当時の俳諧師たちの浮世草子受容の実態を明らかにする。また、これを作品の精確な読解につなげ、それぞれを文学史上に新たに位置づける。

３．研究の方法

(1)元禄俳諧ならびに蕉風俳諧においては、詞の意味上あるいは修辞上の直接的な連関による付合、すなわち〈親句〉が否定され、その対である〈疎句〉が流行し、これがそれまでの西鶴の俳諧と抵触したため西鶴は俳諧から遠ざかり、浮世草子の創作に没頭したとみなされてきた。しかしながら、その後俳諧に復帰した西鶴晩年の作には、〈疎句〉化の傾向が顕著に認められる。研究代表者は、これが当流俳諧への単なる迎合ではなく、むしろ浮世草子創作の経験を経て得られた新たな方法であるとの見解のもと、西鶴と団水の元禄期の俳諧作品について、その付合の方法を分析して新たに注解を加え、その特徴を明確にした。また、元禄俳諧や蕉風俳諧との類似点・相違点について分析した。

(2)俳諧と浮世草子の間にみられる発想や内

容面の共通性を指摘しつつ、西鶴の浮世草子と俳諧の関連性ならびに当時の俳諧師たちの浮世草子受容のさまを追った。また、西鶴と団水の俳諧寓言論について分析し、浮世草子と俳諧の創作理論の背景、関連性について検討した。その際、近世初期の古典注釈学の内容とその享受のありさまを精査しつつ、西鶴と団水の浮世草子および西鶴周辺の俳諧師たちの連句の内容分析を行い、それらにおける古典理解の変遷について精査した。

４．研究成果

(1)研究代表者は本研究課題開始時までの研究において、西鶴晩年の俳諧では、談林俳諧由来の〈ぬけ〉〈とび〉といった手法、すなわち前句の「物」と付句の「物」との間に客観的な意味の繋がりを保ったうえで、常套的もしくは直接的な付合語が句の中に表出するのを避けて疎句俳諧を成立させているさまを具体的に指摘した。しかしながら、様々な俳体が乱立したとされる元禄期には、同じく〈疎句〉ではあってもその作法には作者毎に違いがみられる。この点につき、『俳諧四国猿』（元禄 4〈1691〉年刊）における西鶴と阿波の律友との両吟半歌仙を分析し、付合語の連想・発想の方法において両者に相違がみられることを報告した（学会発表「西鶴晩年の俳諧について」立教大学日本文学会、2013 年 7 月 6 日、「西鶴と元禄俳諧」（俳文学会東京例会・西鶴研究会・浮世草子研究会共催シンポジウム「西鶴と俳諧」、2013 年 12 月 21 日）。また、これらの学会発表をもとに、元禄期の西鶴の俳諧における〈意味〉の含ませ方について、連句作法の特徴や他の俳諧師との関係をふまえて検討した。現在それについての論文を執筆中である。また、元禄期における西鶴および団水の俳諧諸作品に関して調査・分析し、その研究成果の一部を「『団袋』所収西鶴・団水両吟半歌仙注釈稿（二）」（『京都語文』、18 号、2011 年 11 月）としてまとめたほか、『俳諧石車』（西鶴著、元禄 5 年刊）と『俳諧特牛』（団水著、元禄 4 年刊）にみられる西鶴と団水の俳諧観の共通点と相違点を整理し、これに注解を加えた（『西鶴と団水の研究』和泉書院、2013 年に収録）。

(2)『好色破邪顕正』（貞享 4〈1687〉年 5 月序）は、当代の好色本のみならず当時流行の浮世草子をも批判した書として従来注目されてきた。本書が団水作であることや、『伊勢物語』『源氏物語』『徒然草』の古注釈書を用いて執筆されていることは拙稿「団水の初期作」（『近世文芸』81 号、2005 年）にすでに述べてあったが、本書の「好色論」の内容についてはさらに追究する必要があった。そこで、本書が当時の『徒然草』注釈書の記述にもとづいて「物のあはれ」を喚起しうるいわば正しき「好色」を認める立場をとること、それまでの勢語学・源語学に説かれていた虚実説、寓言説を実直に踏襲していることを指摘した（学会発表「団水の好色論」佛教大学国語国文学会、2012 年 11 月 24 日）。本書は、古典注釈書の好色論を当代の好色本批判にまで敷衍しつつ、虚実の正しい理解を示し、西鶴や団水の俳諧、浮世草子は好色の放埒を勧めるものでも「嘘」「偽」でもないことを理論的に跡付け、その正当性を明らかにしようとした書であると考えられる。

(3)俳諧に関してこれまでに得られた研究成果に基づき、西鶴作浮世草子の創作方法について分析した。うち、『西鶴諸国はなし』巻四の七「鯉のちらし紋」に関する分析を論文としてまとめた（『鳥獣虫魚の文学史　魚の巻』に収録、三弥井書店、2012 年 7 月）。本稿は、俳諧の連想語を軸に話を展開することにより複数の典拠を違和感なく配合し、その落差を楽しむ、西鶴浮世草子の特徴のひとつを具体的に示したものである。

(4)研究代表者がこれまでに発表した西鶴と団水の浮世草子、俳諧および両者と出版書肆との関係についての論文に全面的に加筆・修正を施すとともに、上記(1)(2)(3)を含む本研究課題における研究成果を加えて、『西鶴と団水の研究』（和泉書院、2013 年 2 月）として刊行した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 水谷隆之、「『団袋』所収西鶴・団水両吟半歌仙注釈稿（二）」、『京都語文』、18 号、査読無し、2011 年 11 月、pp.252-263

② 水谷隆之、「研究史を知る 北条団水」、『西鶴と浮世草子研究』、5 号、査読無し、2011 年 6 月、pp.224-228

〔学会発表〕（計 3 件）

① 水谷隆之、「西鶴と元禄俳諧」、俳文学会東京例会・西鶴研究会・浮世草子研究会共催シンポジウム「西鶴と俳諧」、2013 年 12 月 21 日、青山学院大学青山キャンパス

② 水谷隆之、「西鶴晩年の俳諧について」、立教大学日本文学会、2013 年 7 月 6 日、立教大学池袋キャンパス

③ 水谷隆之、「団水の好色論」、佛教大学国語国文学会、2012 年 11 月 24 日、佛教大学紫野キャンパス

〔図書〕（計 2 件）

① 水谷隆之、和泉書院、『西鶴と団水の研究』、2013 年 3 月、351 頁

② 鈴木健一編、三弥井書店、『鳥獣虫魚の文学史　魚の巻』、2012 年 7 月、pp.243-260

６．研究組織

(1)研究代表者

水谷　隆之（MIZUTANI,Takayuki）

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：60454500